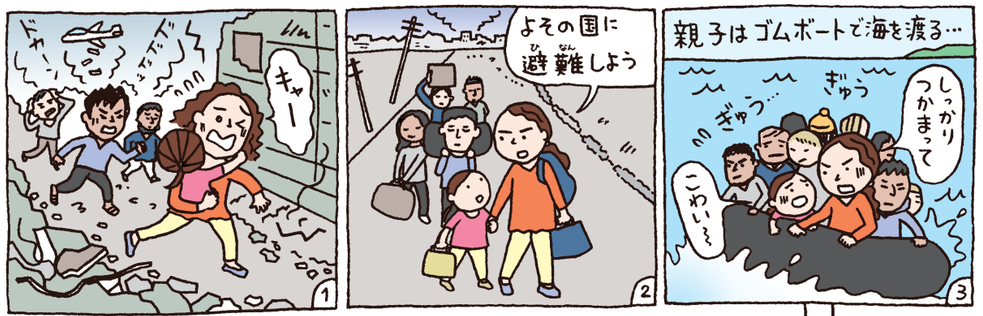
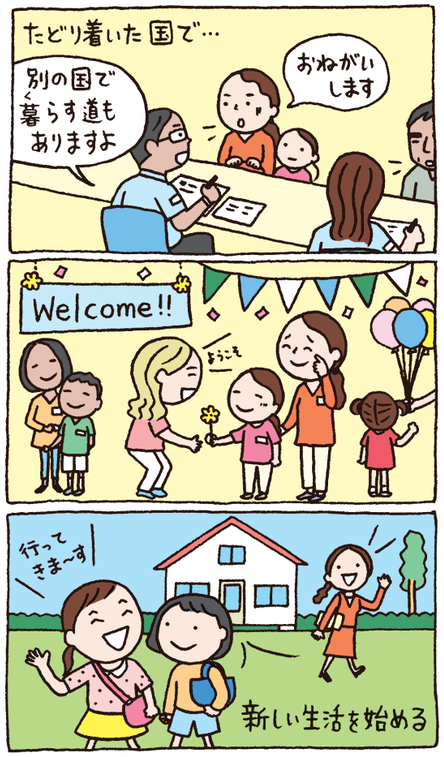
運命の分かれ道 ～難民編～



きちんと保護されると…



助けが足りないと…

私たちが明日の命を心配せずに毎日を送ることができるのは、法律や制度で国が私たちを守っているからです。しかし、世界には国が国民を攻撃したり、守ることをやめたりするケースがあります。こうした「国が守ってくれずに国外へ脱出した人（難民）」を、「世界中で助けよう」と世界の国々が約束しました。

助けるのは、まずは逃れた先の国です。でも今、難民となってしまった人の数がものすごく多くて、きちんと助けることができていません。そのため、逃れた先とは別の国でも暮らせるようにすることが、とても大切です。

アムネスティ・インターナショナルは、1961 年生まれの国際的な団体です。世界 200 カ国で 700 万人以上の人が活動しています。はだの色がちがうから、宗教がちがうから、よその国から来たから、女性だからと差別や暴力に苦しむ人、政府と違う意見を言っただけで捕まった人、紛争で自分の国に住めなくなった人などの命や自由を守るために、政府や社会を動かす活動をしています。ノーベル平和賞を受賞しています。

発行日：2020 年 2 月　発行：公益社団法人アムネスティ・インターナショナル日本
〒東京都千代田区神田小川町 2-12-14　TEL: 03-3518-6777　ウェブサイト：http://www.amnesty.or.jp/

AMNESTY INTERNATIONAL

あむねこ

Vol. 1

アムネスティ子どもニュース

いいことばかりではないオリンピックの話

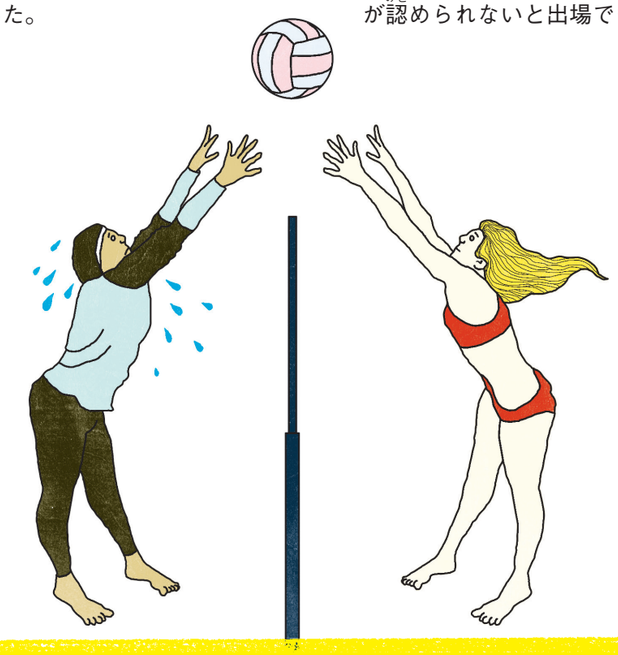
**いよいよ今年8月、東京でオリンピック・パラリンピックが行われます。
今から楽しみにしている方も少なくないでしょう。
オリンピックは120年以上前に始まりました。時代と共に変わってきたオリンピックを、
差別などの悪い面とそれを乗り越えてきた歩みから考えてみました。**

女性は参加できなかった第１回大会

第１回オリンピックは、1896年ギリシアのアテネで行われました。スポーツで心も体もたくましくなり、異なる国の人たちが競技をしながら仲良くすることで、世界が平和でよりよくなることを目指しました。その考え方は今も変わっていません。

ただし、第１回大会に出場したのは男性だけでした。第２回のパリ大会から女性も参加しましたが、全出場選手997人のうち、わずか22人でした。その後女性選手は増えていきましたが、イスラム教を信じるいくつかの国では、その後も長く女性選手を認めませんでした。ようやくすべての国・地域から女性選手が出場したのは2012年のロンドンオリンピックで、第１回から100年以上かかりました。

しかし、イスラム教徒の女性の服装には、頭をおおう、体の線が見えないようにするといった決まりがあり、そういうユニフォームが認められないと出場できないと



いう問題があります。逆に、そんな服装の決まりを嫌だと思うイスラム教徒の女性もいて、難しい問題です。

人種差別で揺れ続けたオリンピック

1904年アメリカのセントルイスで行われた第3回オリンピックでは、公式競技とは別に「人類学の日」という行事が行われました。これには世界中のさまざまな少数民族の人たちが、原始的な生活をしている人たちとして「展示」されました。まるで動物園の動物のような扱いで、同じ人間として考えていなかったのです。当時オリンピックの公式競技には白人しか参加できませんでした。

その後黒人も参加できるようになりましたが、逆に国として有色人種を差別していた南アフリカ共和国は、60年後の1964年東京オリンピックから7大会連続で参加が認められませんでした。世の中の人種差別が全部なくなったわけではありませんが、このころには人種差別がよくないことだと考えられるようになったからです。1991年に南アフリカはこの人種差別をやめ、1992年スペインのバルセロナ大会でようやく出場できました。

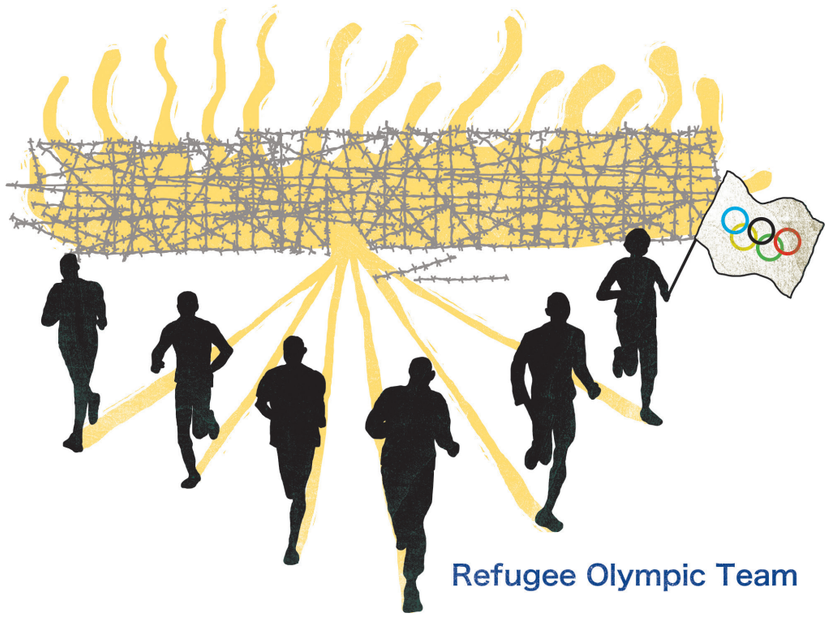
スポーツを楽しむ自由を得た難民たち

戦争が起きると、スポーツどころではありません。アフリカなどのいくつかの国では、何年も戦いが続き、安心して生活できなくなった人たちが、たくさん自国から逃げています。そういう生まれ育った国から逃れて他の国で暮らさなければならなくなった人たちを「難民」と言います。難民の中には、自国でスポーツをしていた人たちもいます。2016年ブラジルのリオデジャネイロ大会では、いろんな国のそんな人たちが集まって「難民チーム」を作り参加しました。開会式では、多くの人が彼らを暖かく迎えました。オリンピックは平和の祭典だと、みんなが思ったことでしょう。

オリンピックのために家をなくす人も

そのリオデジャネイロ大会も、いいことばかりではありませんでした。競技場などを建てるために、25万人もの貧しい人たちが住んでいる場所から追い出されました。2008年の北京オリンピックでも、多くの貧しい人たちが家を奪われました。

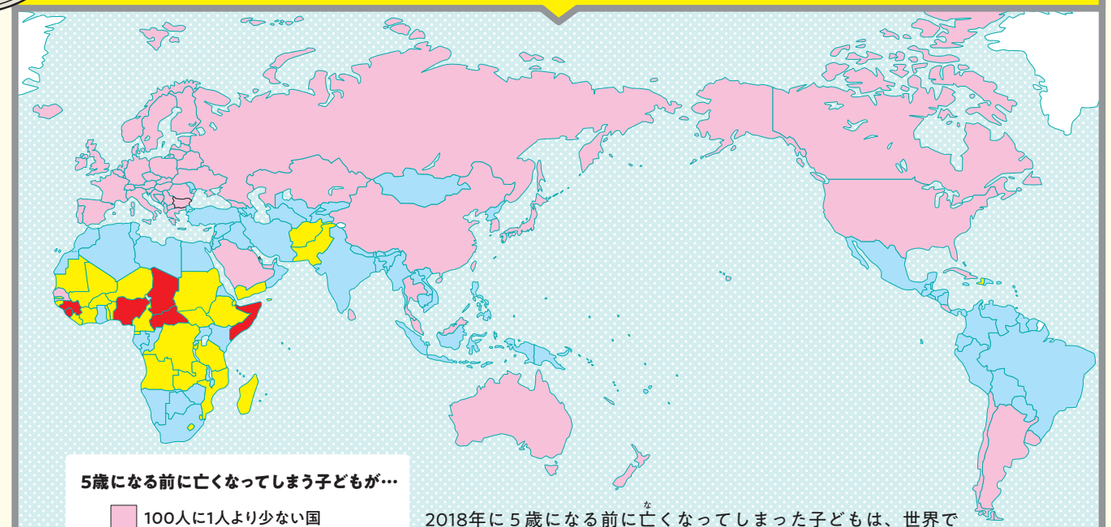
オリンピックで選手たちが競い合う姿は感動的ですが、その舞台を作るために何が行われているか、私たちはよく知り、考える必要があります。



「Refugee Olympic Team」は英語で「難民オリンピックチーム」の意味です。2016年のリオデジャネイロ大会では、10人の難民がチームを作って出場。エチオピア、南スーダン、シリア、コンゴ民主共和国出身の人たちで、この4カ国に生まれ育って難民となってしまった人は、約1,000万人もいます。

地図からわかる世界の問題

5歳になるまで生きられない子どもたちが大勢います



2018年に5歳になる前に亡くなってしまった子どもは、世界で530万人です。その半分が、生後1カ月以内に亡くなっています。病気や栄養が足りなかったことが大きな原因ですが、病気の多くは、きれいな水や空気やワクチンがあり、適切な世話をすれば、防げたものです。守ることができた命なのです。

※2018年時点、ユニセフのデータをもとに、独自に作成

子どもにだって権利がある！

第1回 子どもの権利条約とは？

子どもの権利条約（正式名は児童の権利に関する条約）を知っていますか？
本シリーズでは、この条約を紹介していきます。

条約とは国と国との約束です。子どもの権利条約は1989年11月20日に作られ、今では日本を含む168カ国・地域が賛成し、この内容を守ると約束しています。

子どもの権利条約は、なぜ作られたのでしょうか。子どもは心も体も大人より弱いため、貧しくて食べ物が買えないと病気になったり、住んでいる地域で戦争が起きると大人より大変な目にあいやすいのです。また、子どもは言われたことを信じやすいため、周囲の大人や親から暴力を受けたり、学校に行かせてくれず働かされたりしても、「そういうものなんだ」と思ってしまいがちです。大人がよかれと思って子どもの自由をしばったり、意見を聞いてくれないこともあります。

弱い子どもたちを守り、子どもたちがすくすくとまっすぐ育つように、「子どもにとって一番いいことは何なのか」「そのために大人はどうしたらいいのか」ということを世界中の国の人が集まって考えてできた約束が、子どもの権利条約です。子どもにも大人と同じようにひとりの人間として権利を認め、さらにこれから育っていく子どもならではの権利も定めています。

条約ができてから30年が経ちましたが、今でも苦しんでいる子どもたちがいます。つらい思いをしている子どもは、自分に権利があることを知りません。まずは、権利があること、その権利はどんなものかを知ることから始めましょう。みんなが安心してすくすくと育つ基本となるのが、子どもの権利条約なのです。

次回から、子どもの権利条約にどんなことが書いてあるかを紹介していきます。お楽しみに！